

つつじヶ原自然探勝路

自然探勝路

つつじヶ原自然探勝路をたどると、背の高いアカエゾマツの森、高山植物の野原を通して、今も活火山として噴煙の立ちのぼる硫黄山（アトサヌプリ）に到着します。木製の曲がりくねった遊歩道を山に向かって歩いていくと、明らかな植生の変化に気づくでしょう。コースの始まりではアカエゾマツやシラカンバが主流ですが、奥に行くにつれて森が開けるとイソツツジが一面に広がっています。6 月には、イソツツジの白く繊細な花を咲かせます。硫黄山の近くでは火山灰がまるで絨毯のように地面を覆っています。火山灰が積もっているのにも関わらず、ハイマツやガンコウランなどの植物、そして色鮮やかな地衣類などがこの地には繁茂しています。

硫黄山（アトサヌプリ）

日本の先住民族アイヌの人たちは硫黄山を「アトサヌプリ」と呼んでいます。「裸の山」という意味です。山の斜面は岩だらけの荒れ地で、自然にできた数えきれない噴気孔が蒸気を噴き出しています。硫黄鉱床が辺りを鮮やかな黄色に染め、硫黄山を別世界の姿に変えています。硫黄山の下から湧き出る温泉水が川湯の町に流れ込み、川湯温泉の湯船を満たすために汲み上げられています。

硫黄山の歴史

硫黄山は川湯エリアの発展の礎でした。19 世紀に豊富な硫黄鉱床が発見され、1870 年代に商業採掘が始まりました。硫黄を運ぶため、北海道で二番目となる鉄道線路が敷設され、この地域は新興都市が出来るなど急激な発展を遂げました。今ではもう採掘は行われていませんが、硫黄山の麓にあるビジターセンターで、硫黄山で採掘した硫黄を運搬した蒸気機関車の小型模型や、明治時代（1868–1912）の採掘道具を見ることができます。

硫黄山の地

硫黄山の荒涼とした景観は周辺の山並みの豊かな緑と対照的です。硫黄山の強酸性土壌では、かなり丈夫な植物しか生育できません。ここで生育する植物は、土壌中のバクテリアが不足しているため、枯れたあとも腐敗しません。地面にはハイマツの折れた枝や曲がった枝や、ときには小鳥や小動物の死骸が散乱しています。このように厳しい状況が、まるで別世界のような環境を作り出しています。また、このユニークなエコシステムを保全するための取り組みが行われています。

イソツツジ

主にアラスカやグリーンランドやシベリアなどに見られ、荒れた土地で繁茂します。硫黄山の麓では、およそ 1 平方キロメートルの広さにイソツツジが群生し、6 月の開花期には綿球状の白い花が一面を覆います。酸性土壌のため、他に生育できる植物は少なく、この耐性の高い丈夫な低木はこの地で群生しています。過酷な自然環境から身を守るために、ハイマツの根本周辺に密生しているところにも注目してみてください。

ハイマツ

ハイマツは、きわめて厳しい環境で生育できる耐性の高い丈夫な低木です。通常は標高 2,000 メートル以上の高地に生育する本州のハイマツと違って、ここのハイマツはより低い標高で見られます。硫黄山周辺の酸性土壌にも関わらず、ここでは海拔 150 メートルの地にハイマツが生育しています。ホシガラスは、ハイマツの松ぼっくりの種子を餌にします。彼らはとても賢く、くちばしを使い、タネを岩の間へと押し込み、厳しい冬に向けて食糧を備蓄します。

ガンコウラン

ガンコウランは、ハイマツと同じように当地に群生する高山植物です。ガンコウランは春の雪解けを待って、このエリアの他の顕花植物に先駆けて繊細な赤い花をつけます。秋になると、桑の実に似た暗紫色の実をつけます。かつて日本の先住民族アイヌの人たちはガンコウランの実を使って染料を作っていました。現在では、この地特有のジャムが作られています。

ハナゴケ

硫黄山に向かう道筋で、地面に目を凝らしてみてください。とても小さな赤い花のようなものに気づくでしょう。それがハナゴケという地衣類の一種です。地衣類は、他の生物が生息できない場所でも生き抜くことができます。この耐性の高い地衣類は、硫黄山から降り注ぐ火山灰を吸着し、火山灰が土壤に染み込むのを防いでおり、つつじヶ原の生態系にとって極めて重要な役割を果たしています。阿寒摩周国立公園の火山地帯を探検するときは、火山地帯の生態系で重要な役割を果たしている、この地衣類を探してみてください。